曹青通信

発行所
曹洞宗青年会
〒105 東京都港区芝2-5-2 曹洞宗宗務庁内
編集・発行 曹洞宗青年会
TEL03・434・5411㈹

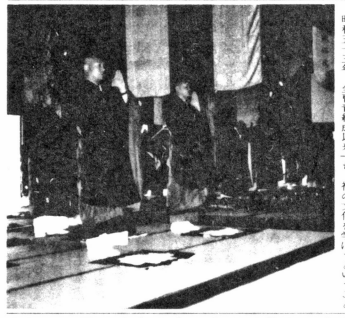
第四回 禅文化学林について

相州大雄山につどう

総授戒運動が宗門の中心運動として動だしてきたが、我々青年会は、すでに昨年二月に静岡県で開かれた第三回禅文化学林において、禅のつどいに授戒をとり入れる方法を求めて、大本山永平寺丹羽福貴真管長師を師として、「青年授戒会」を開催した。禅文化学林の歴史の中で、一つの方向が示されたといえよう。そして、今季、第四回目は会場を神奈川県の大雄山に移し、余語宗厳山主老師を戒師として、再び「青年授戒会」に挑戦することとなった。昨年に勝るとも劣らぬ「禅文化学林」となるであろう。

禅文化学林の歴史をひもとけば、当初我々が目ざしたものは、禅の文化を学ぶ場をもとうということであった。当時の青年会の大きな事業の中には文化研修の色彩が強くみられ、海外文化交流、茶と禅のつどい等々がみられ、好評を得ていた。

一方、青年会本流ともいうべきとするグループには、中央に対して禅のつどいのフォローアップの解決策を望む声が多かった。もちろん、いくつかの地区の禅のつどいは独自に参加者に対する事後指導を試みていたが、多くの禅のつどいは経験豊かな参加者に対する指導に頭を悩ませていた。年二回開催される「禅のつどい中央研修会」ではいつもその問題がもち



ちあがった。

昭和五三年、全曹青結成以来四年、我々はこの二つの問題、即ち、禅の文化を学ぼうということと、禅のつどい参加者へのフォローケアーを結びつけたものである。

大本山総持寺で開かれた禅のつどいや史結集第二回禅文化学林がそれである。内容は、食作法入り、墨跡研究、禅茶術、仏像研究ありで、更に西大寺大茶盛をとり入れて、更にバラエティにとんだ学林であった。

第一回は会場を雪の大本山永平寺に移し、徹底した講義方式をとり入れつつも、僧堂で茶式を行い表千家・裏千家両宗匠の記念講演を設けたりもした。

つづいて、昨年度の第二回が、冒頭に記した静岡県、石雲院で開催された「青年授戒会」であった。この年、日程の都合から、禅のつどい中央研修会の後期開催も併せて行ったため、授戒会とながら、修証義基づいて佛教の基本的知識、実践、禅に日常底のつながら理事各々の意見を十二分に網羅し組織委員会を中心に現在皆々様の忌憚なる御意見をお聞き致しました。今後の予定案一覧には、内容講師に依るシンポジウム、寺の機能展望が掲載されてはいますが、詳細は書きますが、団体加入の問題で、各地の状況把握、評議員会、会場説宣の問題、各地域代表選出等、極めてわかりやすく図解入りテキストになることが定まっており、これをもとに懺悔徒研修に向様を出版に向けて、鋭意編輯中です。

第二回目は、「坐ハングリー」新潟県、「全教区禅のつどい開催」宮城県の事例発表過度期山義豊寺を会場に、神奈川曹青の力をもと、宗教者の心の奉仕運動として社会全体に心を投げかけ運動へと押し進めたいと具体的にも戒弟となるべき在家一般参加者より、青年会員とが多くという現実も生んだが、禅のつどいに授戒をとり入れる一つの試みとして、今年は昨年以上の成果をあげ、研修委員会が編集した資料、授戒会の手引」はたちまちのうちに

なくなってしまった。

青年会員は手引書を手にして授戒会の研修をとつつ、禅文化学林を進行し、その中で、一般参加者は礼仏と説戒の形でおこなわれる講師の講義を聞くという方法をとった。

一切の衆生に信ずる心の御命、仏心が戒を受けることによって目覚めるとういう授戒会を、我々が主体となって開催している禅のつどいに、それぞれ宗門で最も多く青層が入れることができれば、マンネリ化の風潮の中にある禅のつどいに光明を与えるものとなりうるに違いない。

さて、第四回の禅文化学林であるが、詳細については別掲の開催要項の通りであるので省略するが、今年度、再度、青年授戒会を開催することについての意義について少しく述べなければならない。

再度の開催ということは、前回の成果を更に前進させる意味をもつことにほかならないが、その重点を三点にしぼってみると、第一は、戒弟となるべき一般参加者の手引書を手にして授戒会の手引」はたちまちなくなってしまった。

第二は、説戒としての講義を更に充実するため、「修証義の根底とした「仏教の生活」ハンドブック「新書版」を作成し、終了後は入生読本となるものを配付した。

第三は、今まで通り僧堂を会場とすることによって、参加者には僧堂生活に順じた日程を経験していただく。

当然のことであるが、こうした事業の開催には、我々の綿密な計画はもちろんであるが、会場主の全面的な協力が欠かせない。その点、余語宗厳山主には、我々の志すところを理解して下さり、全山を開放の上、戒師として下さり、全山の禅のつどいに参加して下さるとのお指導してくださいました。

会員諸氏には、各地区の禅のつどい参加者に対し、第四回禅文化学林への参加を最非お奨めしたいと思います。

必ず出世間いなる喜びを感じていただけるであろう。元来生れた時から、国の違いや人種や家のちがい、風俗習慣等を異にする環境等異っているのものもは一つもないという不平等であり、この平等のてまえと平等の本音の違いを、現代社会の人間の苦悩である。毎日の生活の一つ一つの苦しみを救ってほしいと願い、人間の人格を祈っているが庶民信仰なのであり、これらの応病与薬の対応が大乗仏教の説く道であり、それがわれわれの使命である。

年頭所感

年頭に当たり謹んで御挨拶申し上げ全国会員各位の御安泰のほど祈念申し上げます。

昨年度中は、全曹青に対し種々御協力、御支援を賜り有難うございました。本年度は各種事業が目前に控えております。何卒心強い応援の程お願い申し上げます。

昨年発行をみました「曹青のあゆみ」は発足以来既に七年経過、その間、各地における青年会の流れが変わり新旧交替が著しく行われた時期でもあります。それらの点を踏まえ今日までの歴史的過程を通じ、今日までの地方集会の青年会のさまざまの流れを概観、読して曹青のあゆみを知ることが出来、更にデザインが「坐ハングリー」印刷技術、装丁に工夫を凝らし内外共に好評です。

さて本年度は、先ず二月五日に「禅のつどい」静岡県、「坐ハングリー」新潟県、「全教区禅のつどい開催」宮城県の事例発表過度期山義豊寺を会場に、神奈川曹青の力をもと、宗教者の心の奉仕運動として社会全体に心を投げかけ運動へと押し進めたいと具体的にも戒弟となるべき在家一般参加者より、青年会員とが多くという現実も生んだが、禅のつどいに授戒をとり入れる一つの試みとして、今年は昨年以上の成果をあげ、研修委員会が編集した資料、授戒会の手引」はたちまちのうちになくなってしまった。

青年会員は手引書を手にして授戒会の研修をとつつ、禅文化学林を進行し、その中で、一般参加者は礼仏と説戒の形でおこなわれる講師の講義を聞くという方法をとった。

一切の衆生に信ずる心の御命、仏心が戒を受けることによって目覚めるとういう授戒会を、我々が主体となって開催している禅のつどいに、それぞれ宗門で最も多く青層が入れることができれば、マンネリ化の風潮の中にある禅のつどいに光明を与えるものとなりうるに違いない。

さて、第四回の禅文化学林であるが、詳細については別掲の開催要項の通りであるので省略するが、今年度、再度、青年授戒会を開催することについての意義について少しく述べなければならない。

再度の開催ということは、前回の成果を更に前進させる意味をもつことにほかならないが、その重点を三点にしぼってみると、第一は、戒弟となるべき一般参加者の

●●●組織会則見直しの時期到来か●●●

―個人加入より団体加入への移行を中心に―

組織委員検討案

●趣旨

全曹青が発足当時よりかかげてきた四つの基本テーマである。

一、青年宗侶のエネルギーを結集しよう。

二、社会的価値ある活動をしよう。

三、青年宗侶の自覚を促そう。

四、地域における活動の連携を深めよう。

を自覚し実践し前向きの姿勢と歩んで来ました。

その結果各地域ごとに数多くの地方の曹青が組織化され、それぞれ活発な曹青活動展開されておりますことは、全曹青が着実に歩んできた実績のたまものであります。

しかしいかんせん地方の曹青が和を広げながら活動を行うなかで、ともすれば全曹青に対して不信感を持たれつつあるのが現状であります。

いわゆる青年宗侶の地方における素晴らしい自覚ではないでしょうか。

その全国の志を同じくする青年宗侶のエネルギーを結集し、一丸となって曹青が目ざす目的に向って邁進出来得るような期待に満ちた組織会則の充実を、あらゆる角度より検討していきたい。

●改正案の大綱

一、地方曹青の組織充実をふまえ、地方曹青の結集により全曹青が組織化し充実していく組織、会則を作りたい。そのために、全国の会員が中央に結集することは、大変な労々と費用を要するので、各地区の連絡協議会、管区曹青、を育て力のある組織とし、全曹青と地方曹青の中間的ライブ的活動が活発となるべく目ざしたい。

二、団体加入を表面に出し、未組織地域の所個人加入も可とする。但しその地域の会員には組織結成運動を順う。個人加入は発足以来だれでも容易に入会出来るということでその方式がとられてきました。しかし、個人加入するかの問題は、当初より番大きな問題として論議されたのであります。全国にある曹青が各々の事情が複雑多様であったために全曹青を発足するには個人加入が一番よい方法であろうとなった。しかしその時に将来は団体加入となることが望ましいと話されたそして全曹青の発足が刺激となり多くの地方曹青が結成発展してまいりましたのの今や時到来したので団体加入へ移行すべく組織会則を改正していきたい。

三、委員会活動の充実を計り、会員の参加意識の高揚と会員へのメリットを計る。現在の委員会は、

①広報委員会（曹青通信）

②事業委員会（出版関係）

③研修委員会（つどい等）

④組織委員会（組織拡大）

であります事業は大変むづかしいことでありますが、これらについて研究実行ができる委員会の組織としたい。

●見直しのおもな点

一、名称の検討……全曹青、地方曹青、管区曹青等

二、会長、理事、評議員、委員長等の役員の選出方法

三、理事会、評議員会、各委員会の議決内容と任事内容

四、会費納入方法と資料等の配布方法

五、会則各条の見直し

以上は組織委員会で現在まで検討された案です。昭和五十七年五月の総会に提出すべく準備を進めています。

会員各位よりの見なおし案、御意見等をおよせ下さい。

組織委員会

四つの核が円滑に道環するのが理想

第4回 中・四国地方集会

中・四国地方曹青愛媛大会
昭和56年11月28～29日 松山市民会館

ふれあいの家庭を築こう

中・四国地方集会を終えて

第4回中・四国地方集会は、去る11月28日、29日の両日、愛媛県松山市道後温泉で開催されました。今年は瀬戸内海を越えて愛媛県松山市道後で会場を設けることができたのであります。今年は、中・四国地方の曹青が一堂に会し、一泊二日、二十八、二十九日の両日、参加者数六十五名に達し、地理的ハンデイを熱意でカバーしたことと自負しています。

曹洞宗にとって四国は寺院数も歴史的要因により非常に少なく、まして中・四国地方の姿も全国的に見ても青年宗侶の姿も全国的に見ても非常に少なく、そこで宗門禅僧が遊行聖でもあった点、特に蟹山禅師とその門下の方々が全国津々浦々に足をはこび、愛媛県曹青が全県的に再結集され、宗務所の方々はじめ県下において青年会に大きな期待が寄せられたことである。この大会が無事催され、収穫と期待を得ることができた影に愛媛曹青各位の半年以上にわたる準備と努力があったことを特筆しておきたい。

最後に、全曹青と地方曹青との連携と信仰者との裏話を抜露していただいた次第である。それをもとに霊場祈とう寺である石手寺、三島市の大三島、大山祇神社、道後温泉、松山城、愛媛県庁、愛媛県立美術館、愛媛県立博物館、愛媛県立図書館、愛媛県立総合文化センター、愛媛県立青少年センター、愛媛県立子供の家、愛媛県立子供の家分館、愛媛県立子供の家分館、愛媛県立子供の家分館

地方集会

的確に行履を追求

九州・北陸・東北同時に開催

第10回 九州地方集会

若手宗侶一丸となって結集

第十回目を迎えた九州曹洞宗青年集会は熊本市ニュースイホテルを会場にまた十一月十九、二十日にわたって開催された。

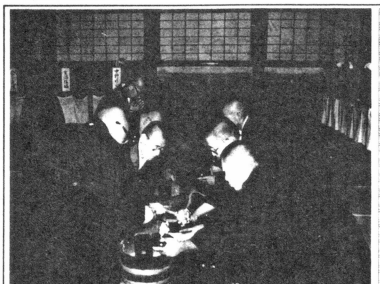
此の大会は九州各教区の持ち廻りで毎年開催されているものであるが、当熊本県には未だ曹青会の設立を見ない利点があり、この熊本大会を共通の目的に従来の大声会、球磨人吉の球磨流域、それに熊本市内周辺ブロックと県内若手宗侶が一丸となって結集し発足した。地区委員を中心に県内各寺院を訪問し青年宗侶の熱意と活動に御理解を願い多額の賛助寄附金をいただき力強い支援に一層の責任と発奮をして大会を成功させる準備を進めた。

十九日は秋晴れの中、正午受付がかけてあるが、改めて自問自答せざるを得ない。

にはまり、地元所長、宗議諸老師、メイインテーマ「大衆教化の原点を全曹青代表など来賓多数の祝辞激励をいただいた。引続き、総会に移り各県曹青の活動況報告、九州曹青の運営のありなどに活発な討論がつづき、その規約組織のための提案がなされ賛否を問うた結果、規約づくりの前進方向へ決定が成った。又、次回集を鹿児島県の当番で引受け開催することを確認した。

記念講演では講師の東南アジア難民救済会議有馬氏師を迎え、カンボジア難民の現地の生々しい報告と体験にもとずき救済の真只中にあって苦しみ嘆こび、本当に彼らのことは彼らの菩提でき益信仰、葬送、鎮魂などと、かくてまるまる本分が看取してつつ、現実「菩薩修行」現場で頂戴する青年宗侶の場にたって発言する若手宗侶の気迫を思いやりつつ、何人にも掲載され、閉会時間いっぱいまで質疑応答がつづいた。

熊本大会は成功のうちに終った。



第2回 新潟地方集会

新潟県曹洞宗青年会主催の第二回僧堂研修が会場を同じ、横越村大栄寺専門僧堂に開催された。総勢五十人の参加者による研修会は、大架裟に云えばたとえ短期的な気分にしろ、生死菩提が、難そんな気概を満足させるに充分な緊張感があった。

日程は、十一月十八日より三日間僧堂の行事に合せ出た。

第一日目、午前十一時開講式、開会式、仮入堂の行、開山登堂、型通りに進み、午後から光寿寺巡、現大栄寺西堂、川口常光老師による「展鉢」坐禅指導が行なわれた。

展鉢法は進退を、九十枚ずつに分解したスライドを作製し、これらを用いたスクリーンを見て実際の展鉢と照し合せての説明はわかりやすかった。大方の好評を得た。

又、禅学事典、を参考に、二度三度と取り直し撮影した苦心の写真が、今回をもって、横越村の大栄寺専門僧堂で開催された。

総勢五十人の参加者による研修会は、大架裟に云えばたとえ短期的な気分にしろ、生死菩提が、難そんな気概を満足させるに充分な緊張感があった。

日程は、十一月十八日より三日間僧堂の行事に合せ出た。

第一日目、午前十一時開講式、開会式、仮入堂の行、開山登堂、型通りに進み、午後から光寿寺巡、現大栄寺西堂、川口常光老師による「展鉢」坐禅指導が行なわれた。

展鉢法は進退を、九十枚ずつに分解したスライドを作製し、これらを用いたスクリーンを見て実際の展鉢と照し合せての説明はわかりやすかった。大方の好評を得た。

又、禅学事典、を参考に、二度三度、取り直し撮影した苦心の写真が、今回をもって、

秋期僧堂研修

佛祖之皮肉骨髄

半日毎に(1)より(4)を交替する様に編成した。

日程にゆとりをもたせ、坑別研修の時間を多くとって、安心して公務にこれる配慮した。

指導・講義

堂頭、川口智祖老師は病気入院の為、残念ながら二重示唆とな

「赴粥飯法」の提唱は、今回をもって、忘終了した。

後堂、川瀬牧生老師は「弁道法」の話、「佛々祖々より未、待、大悟」、この百六文字の中に「弁道法」の全文があるとより説された。

老師は日常、行法不二を実践しておられるだけに一言一句、味わいのある講義は、我々の心霊をふるい立たせるものであった。亦三日目、二班に分れ亀田、新津方面へ出発、先々心暖る茶忘心の供養を受け、十一時帰山、浄鉢五万二千余円は全額福祉の為中心として寄付された。

鳴らし物

初めての人にとってこの役が難しい事は確かだ。三日間を通して、「弁道法」を前題に研修してはどうかと言う意見も出ていた。

西堂、川口常光老師の提唱「赴粥飯法」は、途中で「展鉢之法」に変更、「緊禅一番、身の引き締まる思いがした。

来年引続き予定している「弁道法」は、出きるか否かは別として、応量器数子の開き方で、「向、外二角、向、内、裏、而折、至々」の解釈に、興味あるお話を拝聴された。

尚、二日目、延六時間を費した

展鉢

全僧堂総台で行う。昨年に続いての指導の成果があって、混乱もなく終了した。

まとめ

二回の薬石、一回の行鉢は、地食供薬となり敬しく宜頂、施主応業としての行鉢を体験した。

托鉢

第一日目、心配していた通日の雨も上り快晴、気温五度、午前八時、二班に分れ亀田、新津方面へ出発、先々心暖る茶忘心の供養を受け、十一時帰山、浄鉢五万二千余円は全額福祉の為中心として寄付された。

鳴らし物

初めての人にとってこの役が難しい事は確かだ。三日間を通して、「弁道法」を前題に研修してはどうかと言う意見も出ていた。

寄せられた感想から

昨今、一般社会をはじめ、宗門に於いても、テームの如く研修が開かれている。その多くは教化を中心として、知識の吸収に重点がおかれている様な気がする。然るにこのたびの新潟県曹青の研修会は、それらとは全く異質的なものであって、業林の生活に直参することを目標にしている。雲堂における正身端坐し、本飯台を如法に行し、鳴らし物や各配役を交替して法式を弁じておられた。味におどろくべきことは別として雲堂の単一畳に寝臥された、ことである。弁道法に於ける黄昏から晩天、と続く道環の行鉢が切れ目なく参究された、この恩に報いる様、一同弁道精進しつづいている決議文が採択され、次期開催地、山形県庄内曹洞宗青年会があいさつ、更にその次の開催地・山形県置賜曹洞宗青年会の意志を表明し、東北の力づよさが発揮された。

ここで、集会は一旦閉会し、一般公開による記念講演会が催された。講師は青山俊董尼老師で、「私のみる現代社会と宗教」について講演を、広い大広間は一般聴衆を収容できず、本堂まで聴衆を収容、研修はそのまま大衆教化へと同向された。

大会は、会場が新築、林書院という好条件下にもあったが、主催東北地区曹洞宗青年連絡協議会（戸部実二会長）のもとで大会を主管した宮城県曹洞宗青年会（高橋恭諍会長）のまとまりあり有行動があって、六年目の今年も盛会裡に幕を閉じることができた。

尚、全曹青より桑原会長、村瀬菊地両副会長、南広報委員長、佐藤顧問が出席、大会を盛り上げた。

第6回 東北地方集会

第六回目を迎えた東北地方集会は、今回で東北六県を一巡したことになる。杜の都・仙台の新築になった林香院・門脇光住職を会場として開催された東北地方集会。

「原点」をテーマとして、二日間山内研修という東北集会として初めての大会となった。

東北各県より集まった青年僧は一七〇余名、来賓を含めると二〇〇名に近い参加者となった。

大会は、開会行事に引き続き、東北大学教授・山折哲雄先生の基調講演、仏教信仰の原点、にはじまり、分科会ではいった、分科会は、原点にかえって青年宗侶が果や役割は何か、というテーマのもとに四分科会に分れ、熱心に討議がなされが、議論続出は多少時間不足は味であった。

このあと全体会がもたれ、参加者は山折先生を囲んで「原点」について話合いがもたれた。まだまだたくさんについて、大会プログラムはなかったが、曹洞宗ボランティア会有志による、カンボディア難民救済の報告集会がもたれた。

第二日目は後六時、東北集会名称、東北六県の研修会が、朝課、小食と僧堂並みの研修がすめられ、第一回岩手大会以来つづいて行きたい。

寄せられた感想から

昨今、一般社会をはじめ、宗門に於いても、テームの如く研修会が開かれている。その多くは教化を中心として、知識の吸収に重点がおかれている様な気がする。然るにこのたびの新潟県曹青の研修会は、それらとは全く異質的なものであって、業林の生活に直参することを目標にしている。雲堂における正身端坐し、本飯台を如法に行し、鳴らし物や各配役を交替して法式を弁じておられた。味におどろくべきことは別として雲堂の単一畳に寝臥されたことである。弁道法に於ける黄昏から晩天、と続く道環の行鉢が切れ目なく参究された、この恩に報いる様、一同弁道精進し

東北六県一巡なる

〝原点〟に沸いた杜の都

本青年会に難民救済の感謝状

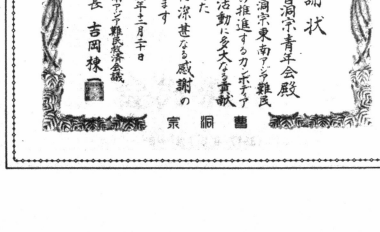
曹洞宗青年会が推進して来たカンボジア難民救済募金活動は、会員見位の温賛を得て、昨年末現在、三百五十万円を越えた。

寄せられた募金は、曹洞宗の南アジア難民救済会議を通じて、南アジア難民救済会議を通じて難民キャンプの寄宿礼拝活動を推持するための食金として運用される事になっている。

尚、この募金に対して曹洞宗南アジア難民救済会議より感謝状が青年会に贈られた。

昭和五十六年度三月以後よせられた難民救済募金一覧表

埼玉県	金剛秀房	救済会議におきましては、各募金協力の寺院及び団体、個人の温賛を得て、青年会を通して寄付及び募金をされました方々に、誠に感謝致しております。つまして、記載しました感謝状を必要とされ希望される方は、事務局まで御一報下さい。
愛知県	松秀寺	
茨城県	日立精神育成会	
茨城県	日立精神育成会	
茨城県	南敬閣	
愛知県	安藤みよを	
京都府	苗秀寺環信徒	
茨城県	日立精神育成会	
茨城県	温五度会	
福島県	日立精神育成会	
茨城県	日立精神育成会	



感謝状

曹洞宗青年会殿

貴会は曹洞宗東南アジア難民救済会議の推進する力ぞえ難民救済活動に多大の貢献をされました。

仏ってここに深甚なる感謝の意を表します

昭和五十六年十二月十日

曹洞宗東南アジア難民救済会議

会長　吉岡禄　東嗣書

岡山曹洞宗青年会記念事業

良寛和尚百五十回奉賛記念

限りないやさしさ——良寛さまの燈の輪をひろげよう！

昭和五十五年は良寛和尚百五十回忌にあたります。この年を中心に、私共は報恩行の勝縁をいただき、良寛さまの人間性・やさしさ・ゆたかさに導かれ、百五十回忌記念事業を企画推進させていただきました。

ここに経過、特に大衆との接点の面を見つめて見たいと思います。日本国民が等しく讃仰する良寛さまは岡山県倉敷市玉島（円通寺に在住）で十数年間修行されました。そして後世の人々に人自然の中に溶けこんだやさしさを示されました。

そこは混迷する現代社会あって一つの光明となっています。私たちは良寛さまのようなやさしさの燈を胸にともす隣人の輪をつくりたい思っております。

ところで本年は良寛さまが遠い「良寛まつり」（十一月一日～三日）に、第三回目を後、時百五十回忌法要の祇園行（十三～名出発、前日から伝道を続ける教化センター伝道車と合流、御修行の円通寺が中心で次の事業を企画推進いたすことになりました。この趣旨のもとに、新潟県曹青記念事業を参考にして事業を策定し「良寛さまの限りないやさしさの燈の輪をひろげよう」の運動を展開し、賛彩に心に響きわたりました。特に国仙和尚・良寛和尚の師・愛用の杖、鉄鉢なども持参、さらと無病息災といい、寄男善女が群がっていました。終了後外吹円通寺住職から「大衆とともに」話があり、修行地玉島で「良寛托鉢像」建立のことが具体化した。また玉島商店街が県当局より商店街活力化のモデル事業地として選定された。その事業の主軸として「良寛まつり」を企画推進することになり、青年も報恩托鉢行をもって協賛する運びとなった。

◇良寛まつり協賛　良寛和尚百五十回報恩托鉢行

昭和五十五年はじめ良寛さまの修行地玉島で「良寛托鉢像」建立のことが具体化した。また玉島商店街が県当局より商店街活力化のモデル事業地として選定された。その事業の主軸として「良寛まつり」を企画推進することになり、青年も報恩托鉢行をもって協賛する運びとなった。

◇良寛和尚百五十回忌記念事業